



斉藤 陽一 さん

●さいとう・よういち 岩手日報社八幡平支局長。盛岡第一高校から北海道大学に進み、平成13年岩手日報社入社。運動部、報道部、東京支社、整理部などを経て、4月から八幡平支局に。趣味は温泉巡り。「まじめそうに見えて、実は大ざっぱ」と自己分析する。「素直に、誠実に」をモットーとする31歳。血液型O型のかに座。盛岡市出身。

二

の4月から岩手日報社八幡平支局に支局長として赴任してきた斉藤陽一さん。3月に異動の内示を聞いたときは「山と農業」が真っ先に頭に浮かんだという。

「食べ物がおいしいし、水もきれいだ。アウトドアな感じで、いいところに異動になったな」と思いましたね」

初めから新聞記者を目指していたわけではないという斉藤さん。就職先を決める上で、心の中にあつたのは「地元に戻りたい。自分のふるさとを良くすることに関わりたい」という思い。北海道で一人暮らしをしていた学生時代に、あらためてふるさと「岩手」の

良さを実感したという。「自分は本当に岩手のことが好きなんだな」と思い知らされましたね」

入社後最初に配属された部署は、運動部。岩手を明るくするためにどこがいいかと考えたときに、単純に思いついた

「記事によって喜ばれることも、嫌な思いをさせることも、うらまれることだ。だってある。その人の人生を左右してしまうことだってある」

「二応援団になってしまってもたびたびですよ。力が入っちゃうんですよね」



華やかな取材でなくても 皆さんの声に しっかりと耳を傾ける それが僕の取材の 基本ですね



かもしれない。当たり前ですけど、記事を与えてしまう影響を考えながら、責任を持って仕事をやりこなさなければならぬですね」

現在31歳の斉藤さんだが、これまで5つの部署を渡り歩き、経験は豊富だ。過去には、畠山長太さん(曲田)の全国中学校スキー大会優勝、小笠原満男選手のサッカーワールドカップ出場などの記事にも携わった。スポーツ取材では、同じ岩手県人として、どうしても感情移入してしまうという。

「二応援団になってしまってもたびたびですよ。力が入っちゃうんですよね」

「仕事をやる上でいつも自分の真ん中にあるのは、ふるさとへの思いなんです。地方だからこそその豊かさ、岩手らしさを発信する手助けが自分の使命ですね。岩手の皆さんの応援団ですから、僕は」

「記事によって喜ばれることも、嫌な思いをさせることも、うらまれることだ。だってある。その人の人生を左右してしまうことだってある」